

最近の保育雑誌より

保育ノート

二月号の特集として「保育者と精神衛生」が扱われた。「保育者の思想としての仏教について」(内山憲尚氏)は保育の祖としての法均尼の精神をとき、仏心を持ち観世音の心を持って仏子を育てることこそ、保育者の道であるという。

高崎能樹氏の「信仰と希望と愛ではぐくめ」では「神に祈ってやまずどんなことがあっても希望を失わず、さらに神の聖愛に同化して生命のかぎりにもどもを愛しぬくこと」をモットーにし、神を水源地としてやることが子どもを完全にする唯一の道だといっている。いずれも宗教的真理に基づいた教育観がにじみ出ている。その他「保育と中立(坂元彦太郎氏)では政府の動向や宗

派の傾向または思想的な潮流に、ただちに賛成反対の態度をきめることが、教育者のもっとも重要な関心事ではなく、もっと奥にあるコミュニケーション、不変の生命をもつ生活共同体に役立つかどうかを、まず考えることが力説されている。その他「ほんものの愛情」すべてのものの調和」でも先生方の未来にねがう強い気持と意気があふれている。

三月号の特集第一頁の「幼児教育者としての反省」が目をはひく。この中で石山修平氏は、まず現場の実践が、どれだけ自分の力にプラスしたかを反省し、自分の足りなさを自覚することによって、新卒の意気みや新鮮さを、もう一度身につけることが出来るだろうといい、また小規模でも現職幼児教育者のゼミナールがおこなわれることにより、一層保育活動の水準は着実に向上されるだろう。更にもっと充実した設備と課程と経営者と教師を持って、ねうちと水準とを実証し得る養成機関が実現されな

くてはならない。そして在学中と卒業後とを一見して、もっとも適切有効な課程がつけられることは、日本の幼児教育者の教職を、名実共に新しいものとして確立させるであろうと結んでいる。この「反省」にもなう「希望」の実現がすみやかになされることを願わないものはあるまい。

四月号のカリキュラム解説は、「園内の自然に親しませましょう」「よく聞く態度を育てましょう」「園は楽しいところ」「おもちゃさん」「子どもの心にとけこんで」などがある。その他「三歳児の扱いかた」がおもしろい。

月刊保育カリキュラム

二月号は三歳児の保育技術についてそれぞれの分野で取扱っていた。「狼ごっこ」の誘導」では、劇あそびのような系統的なものでもなく、また全くの自由なごっこ遊びでもなく、自由遊びの中にごく自然におこな

われた狼ごっこを、七匹の小山羊や、三匹の子豚、赤頭巾などへ発展させるきっかけとなるよう誘導した具体例が挙げられている。その他「ペープサートとギニョールの実際」「言語が中心になる指導」「運動量の多いあそび」「絵画製作を主としたあそびの実例」など、これによって三歳児の活動の姿をとらえ、実際に役立つものが多い。三月号には「三歳児カリキュラムの反省と来年への計画」という六人の先生方の座談が認識を新たにしてくれる。三歳児の自発性、三歳児に対する指導性の問題から、具体的なものから抽象的なものへの移行期をどう認識するかが論ぜられている。三歳児はわれわれの社会につながっているというところ、われわれ自身が皆まわりの苦しみを正しくとっていなければ、やはりそれ自身がその不快を起す側の人になりほしくない。繰り返し態度や表情で教えることだといっている。未知な子どももの創造性をどういう風に発揮させるかという点にまで及び、根本

的な問題や今後の問題を話し合っている。

基督教保育

二月号に「お話による道徳教育」がのせられている。ここではまず子どもの善意についての判断が述べてある。すなわち子どもは悪いことは何かをよく知っている。だから子どもの生活にとっては、普通の行動をするのが善いことなのであるという。お話による徳育的效果の一つとして、まず話し手と子どもとの間の親愛の情が生れ、更に他の仲間同志の人間関係が深められ、そのグループ共通の判断が出来るようになること。第二に納得の仕方が自主的になる。第三は事前によく考えてから行動する態度をお話の中で実践させる事が出来るなどである。それにお話の仕方の注意も参考になる。

保育

一月号に村山貞雄氏の「回想による保育効果と逆効果」という研究がのせられている。これは幼稚園教育を受けたものの内観を通して、その効果と弊害を記入によって調べ、その結果を各方面から考察したものである。それによると一番多く回想されているのが「社会性の発達」で更にその項目をひろってみると「友達あそびが出来るようになった」というのが一番頻数が多い。

二月三月号にも研究がのせられているが、最後に氏は保育効果の研究は、全体論についてさらに、保育方法と効果の關係の考察にまで移らねばならないといっている。

三月号には「人形芝居と保育」「教材としての人形劇の扱い方」「幼児に人形を替わせるために」など視聴覚保育の教材として参考になることがかかれている。

幼児と保育

一月号の特集「幼児教育はどこまで進ん

できたか」の中に「不合理なこと改めたいこと」というテーマで森脇要、秋田美子、日名子太郎諸氏の座談が核心をついていて面白かった。まずその一つは、労働条件が悪いこと。第二は実践記録が出ないこと。第三は保母に実生活の中で自分のものとして育てていこうという態度が欠けていること。更に正しいカリキュラムの認識が不足していること。幼稚園教諭養成と保母養成の二枚の免状を一本立にしたいことなどが話し合われていた。そして最後に、幼児教育を進歩させるには自分たちが進歩しなければ絶対にだめだという自覚を持つこと、一方でそういう夢を持ってきた人を育ててやることがいわれている。職場の中では、皆が職も何もさらけ出して、園長と先生、あるいは先生同志がフランクにもっと大びらで、ざっくばらんに言える雰囲気作らなければいけないと論じている。

二月号には「保育しながら子供を観察する」友田静恵氏の観察と記録の方法が親切

にかかっている。理解の上に立っての教育こそ一層の効果を上げるものであるから、出来ない相談だとあきらめる前にまず取りかかってみることだ。子どもの姿がつかめるばかりでなく、教師の指導が適切であったかどうかの反省にもなるのである。

四月号の特集「こんな子どもにそだてたい」では「幼児期を幼児期らしく(過ぎせること)」「幼稚園は何のためにあるか」について各国のしつけかたと幼児教育のありかたをみる座談会などがあつた。座談会では、家の構造、親の考えかたから、また、日本でのしつけは、みっともないというみえからきていること、各国の幼稚園で、やっていることがずいぶん違うこと。各国の教員養成のことなどにふれていた。

五月号では「行事を生かした幼児教育」についていろいろな方面から考えられている。行事はえらび、修正し、工夫をこらして、教育のねらいを生かしていくことが必要であるといっている。

幼児の教育 第五十七巻 第七号

七月号 ◎ 定価 五十円

昭和三十三年六月二十五日印刷

昭和三十三年七月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。